

変革の戦士

No. 1

民主主義学生同盟
市大支部機関紙 9/11

ソ連のチエコへの

軍事介入に抗議する！

「米独帝」主義のチエコ介入を粉砕せよ。
「チエコ」人民の社会的自由のための

はじめに——変革の戦士

民主主義学生同盟次の国全口大会は、八月、大阪で開催した。この大会の意義は、大公会（三月）で、一部日独親主義勢力を出しなからる確證、いた、勃動のセウ軍保斗争を担う不屈の戦斗的自治同盟の建設の過程を反映する（一）。セウ軍保斗争の国際主義的性格、体制変革的メメントを見抜いた我々同盟は、それと自治同盟の中に更に血肉化し、セウ軍保斗争を更に闘い抜く事をもった行動的多数派を形成する目的の方針を確立する（二）であった。

我が同盟は、市大における中派と等の取柄にもわかつて、新結成支部の奮闘前進と、同盟の全国的影響力・指導の確立の中で、新なる存続の条件を成熟させてつある。このような情勢の一方で、自治会系三連助の昨秋からの急進的発展は、今七月全国自治会系に三十数自治会を結集し、単一全連連再建に向けこのまゝ困難なる道の輝くミヤ一步を踏み出した。

我々は、支部機関紙「ポロ」を「変革の戦士」と改題する。我々は、セウ軍保斗争の国際主義的性格を銘記し、体制変革的相変ひとつとつ、自らの斗いを担う、戦斗的同盟たることを宣言する。機関紙改題は、我々同盟は、同盟員個々人の自覚に主である。変革の戦士たるべく自らを正立しつゝあるスウ回、スウ回全口大会の成果の表明でもある。我々は、この自己変革を、空想的な理想に入らなうて行なうのはなく、更に戦斗的な行動と、大衆運動のびくすミズムの中、日獨的恒久的な本断の活動によつて、それと共闘する以上衆性と戦斗性の新しい結合を創出するものである。

民主同盟大支社は、秋期斗争の発展に立つて自治会機能を回復せしめつゝ、変革の戦士としての目的意識性を培つてくるのである。

闘いを断固支持する。

「チエコ」の「自由化」について

チエコにおける「自由化」と評題するについて、社会主義的民主主義、社会主義的自由とはいふべきものでなければならぬ。このように表現するのなによりまづ出さなければならない。

民主主義は、スウに、平等としての民主主義の（一）把握である。マルシヨマ民主主義は形式的平等を画定この指図の表現形態に他ならぬ、社会主義的民主主義は、平等に向上して更に進まねばならない。それはもちろん、生産手段の社会的所有の實現には必要な前提条件、生産関係の根本的変革なくしてあり得ない。

民主主義は、次に、国家形態としての民主主義である。民主主義は、抑圧的権制力の発動を排するものであり、マルシヨマ民主主義は、少数者の多数者への抑圧であり、権制こそである（二）である。したがって、社会主義的民主主義は、その特殊の技術を通じて（三）に国家化され、實現されるに定つていかに発動する民主主義である。この意味で、民主主義の完全な實現、理想上の平等の實現は、民主主義の死滅を意味する。これは、つまり、抑圧的権制の根幹が倒壊した（四）である。

チエコの「自由化」の歴史的背景は、単にチエコにのみならず、スウーリツン時代の中で形成され、スウーリツン批判をも含み取りつていない社会主義的民主主義の同僚主

《ポロ》へつづく

又の面を以て、社会主義的民主主義、社会主義的自由を
認める大衆の行動であった。

スローリン批判は、個人主義として行われたいは
ならず、それを生み出した暴徒の問題を暗くしつつ、社会
主義における意識の变化の問題としてとらえねばならぬ。
だが、この問題を充分に暗くする努力を放棄した世界は
「反スローリン主義」はマルツォマ抑圧からの批判に起る
らず、理念主義である。

大衆の行動と自衛的な政治への参加を要求したチェ
コの「自由化」は、社会主義的民主主義の発展の可能性を
示してやってくれた。我々は、社会主義的民主主義を勝ちと
るためのチェコ人民の叫びを支持する。一に於いて、反
革命、反社会主義と現存するものはある。

「チェコ」自由化の問題点

従って、我々は、ソ連、東独、ポーランド、ハンガリー、
マルタリアのワルシャワ条約加盟五ヶ国の子エゴへの軍事
介入に、断固として抗議する。

その基本的立場を明らかにした上で、「チェコ」自由化
の問題点を正面に明らかにせねばならぬ。もちろん、そ
れは、軍事介入によって解決されるものではない、それは
一に問題を不明確にするものである。

「自由化」は、マルツォマ民主主義と自己を区別し、国内的
要する社会主義的自由への前進するための決定的な最後未だ
充分には明らかでないこと。これは、人民の基本的諸権利
の確立と共に、これと同時に、生産要素なる論議を上げら
れた所作者、人民の直接民主主義的な権力機構を創出する
ことである。

この他にも、幾多の問題があることを、我々は身の内
すくくはわすねて。

帝国主義者にソ連批判の 権利はない

帝国主義者は、御用学者、マルツォマ評論家を駆使して、
ソ連への批判を行なった。米帝は、及一ナム侵略を相対化
するものとして、いや、それを抑上はにいて、ソ連を批判
つてくる。

米帝は、いかに米帝のソ連の武力介入を利用し、
相対化しようとしても、その本性は多量ではない。

だが、我々は、この武力介入は、帝国主義への発射の口
を開きながら、いかに米帝のソ連を批判する。

ソ連をばいめつてワルシャワ条約五ヶ国の子エゴへの
武力介入に於いて、社会主義と革命の名において抗議する。

社会主義的民主主義 のために

民権世代々々は、ソ連の行動を内政干渉であると非難し
ている。しかし、それは、マルツォマ的な不干渉原則であ
り、国家主義的任務を放棄した「自主独立」の表明である。
彼らは、その責任保持を放棄する主義的な「条約放棄要求書
名」にねじまげ、国家主義的任務を、民族主義にのみな
している。

最も大衆の運動をこらけ出した日本のことは、内部での
深刻な分岐をきみつつ、ソ連全面支持と部分的抗議の両を
両方してやる。

社会同は、ソ連の介入に抗議しつつも、同時にには子エ
ゴ路線粉砕を叫び、人民の新たな社会主義建設における
社会主義的自由の発展という重荷の複雑な問題の解決を
回復しよう。

再び確認しよう。

我々は、ソ連をばいめつてワルシャワ条約五ヶ国に於
て、チェコから即時撤兵するよう強く断固要求する。

我々は、社会主義的自由のために、チェコ人民を支持
する。